

新しい教科書で「中国地誌」をとらえさせる

東京都立小金井北高等学校 安西 弘幸

1. 新学習指導要領と教科書

新学習指導要領で強調されている「地理の見方・考え方、地理的技能」を身につけることに対応して、教科書が大きく変化した。

帝国書院の『高校生地理A～くらし・世界・未来～』を一見してわかるのは、豊富な色彩に、旅行パンフレットのように掲載された写真やイラストの多さである。構成も、本文を読めば重要な事項が一通りわかるという形から、資料や写真を使った体験・作業に重点を置くように様変わりし、さながら『資料集的な教科書』の登場といったところである。こうした変化には戸惑いの声も聞かれるようだが、新しい教科書の活用の工夫についても声を集めてゆく必要があると考える。

今回は中国地誌の授業を例に、指導上の工夫について考えてみた。

2. 人々の生活・文化をとらえる

生徒の理解を助ける写真・資料は、積極的に授業に導入したいものである。しかし、景観や物事をただそれだけの知識として確認するだけに留まっていたら、活用として不十分だろう。

たとえば、棚田について学習するとき、「これが棚田です」と写真を提示して生徒に認識させるだけではなく、何故そうした土地利用をしているのか、生活や農作業上どのような苦労があるだろうか、などを生徒に問いかけ、そこから読み取れること、考えられることを引き出して、地域や人々のすがたを主体的に考察させるように役立ててゆく必要があると思う。

中国の生活・文化を扱う際には、たとえば、中国の家庭で食卓を囲んでいるようす（p.110 写真①）を生徒に見せ、主食や盛りつけ、皿の役割などに注目させて、日本との共通点や相違点、漢民族特有の文化を生徒が発見的に理解できるように活用したい。帝国書院の教科書では、『Question』に読み取りの着眼点と質問がまとめられている。『Question』を次時への予習課題として生徒に取り組ませ、次時の冒頭に答えを発表させるような活用法が考えられる。

3. 中国の多様性をとらえる

生徒の興味や意欲を喚起するには、生徒が漠然と抱いている「固定的なイメージ」をひっくり返すような工夫が大切だと思う。学習する地域に対して生徒がどのような印象を抱いているか、問答や事前アンケートで確認し、意外性のある切り口を提示して変化のある授業を行いたい。

たとえば、「中国人はみな漢民族」といった、生徒が抱きがちな誤解は、中国の民族構成や五つの言語で示された紙幣（p.109 図⑤⑥）を使って改めたい。中国の少数民族は約8%だが、約1億人に相当する。「少数」ではあるが、軽視できる規模の人口ではない点も理解させたい。また、白地図の作業を取り入れ、東西に二分された民族分布の特徴や人口分布の傾向などを生徒に実感させたり、クラスをいくつかの班に分け、『Step up』の問いを考察・発表させるのも一案である。

「中華料理」が、風土と食材・調理法によって多様である点も、生徒の興味を引くテーマだろう。気候の特色と、中国の4大料理や米・小麦の栽培



帝国書院版『高校生の地理A～くらし・世界・未来～』p.111

地と羊の分布 (p.111 図③④) を対比させ、食文化を特徴づける要因について理解させたい。ここでも《Question》を活用したいが、内陸の乾燥地には、豚肉ではなく羊肉を食するイスラム教徒のウイグル族が居住している点にも注意させたい。

4. 生活と産業の変化をとらえる

急速に変化している中国のようすを理解させるには、経年変化を確認できる資料や写真を有効に使いたい。

シャンハイの街なみについて、1980年撮影のものとは2000年撮影の2枚の写真を用い、(p.112 写真①②) 双方から読み取った要素を比較させ、《Question》を活用して生活の変化を生徒に考察させたい。また、ファストフードの普及や新たに建設された高層マンション (p.112 写真③④) に関する資料により、都市部における変化がどのように進んでいるか、理解を深めさせたい。

農村部については、農村の住居と田のようす (p.109 写真⑧) によって、平屋の古い住居の隣にある2階建ての新しい住居を確認させながら、都市と農村の生活と対比して考察する課題に取り組みさせてはどうだろう。

中国では、経済政策の転換により経済特区が設

置され、外国資本が大量に流入して飛躍的に工業化が進み、「世界の工場」へと成長した。ここでは、p.113の《Question》を手がかりに、身のまわりに中国製品が多いことを生徒に気づかせ、中国への投資がさかんな理由を、「1人あたりの地域別総生産額とおもな都市の工業生産額」、「製造業における1人あたりの賃金」(p.113 図⑤⑥)を活用して考えさせたい。日本などの外国資本が、安価な労働力を求めて中国に進出したこと、経済特区とその周辺部に工業生産が集中し、漢民族が多い沿岸部と少数民族が分布する内陸部との間に格差が発生していることもとらえさせたい。本文では交通整備や資源開発によって格差を改善しようという政策が示されているが、経済問題と民族問題が複雑に絡み、解決には困難な現状も存在する。

出稼ぎ労働者の声 (p.113) も生徒に読ませ、都市と農村における格差や苦しい立場にいる人々にも目を向けさせたい。発展の影の部分もしっかり見つけ、資料から読み取った情報から問題点を考察してゆく力も、新学習指導要領のねらいと関連しているはずである。また、こうした学習から国際的な動向が人々の生活に深く関わっていることを生徒に理解させたいと考える。

5. まとめとして

生徒が体験的に「答え」を発見してゆく学習は、今後も重視されていくだろう。その中で、地理的技能を伸張するワークシートについて、考察に必要な知識の精選のあり方、地理的見方・考え方が生徒にどのように定着したのかを適切に評価する手だてなどについては、さらなる検討が必要だと感じる。また、中学校の地理で身につけた力を高校の授業でどのように高めてゆくのかなど、様々な観点から、ご指導いただければ幸いである。